

## 在外研究体験記



【リーズ大学パーキンソンビルディング】

筑波大学大学院システム情報系社会工学域  
准教授 奥島 真一郎

鹿島学術振興財団より研究者海外派遣援助（長期）を頂き、2023年3月からイギリスのリーズ大学（University of Leeds）に客員研究員として滞在しています。実際には、複数箇所でも在外研究を行っており、2022年の夏秋にはフランスの西ブルターニュ大学（Université de Bretagne Occidentale）にも滞在していたのですが、今回はリーズ大学について書きたいと思います。

### リーズ大学について

リーズ大学は、イギリスウェストヨークシャー州にあり、イギリスの名門大学群ラッセルグループに属する研究型大学です。キャンパスの中には、リスやウサギが駆け回っており、以前いたことのあるアメリカのイエール大学のキャンパスとも類似しています（イエール大学は「ニュー」イングランド地方にあるので当然かもしれません）。リーズ大学のキャンパスはコンパクトにまとまっています。写真の Leeds University Union (LUU) に行けば、食堂、スーパーなどが揃っており、基本的に学内で生活は完結できます。また、10分程度歩けばリーズの中心部に行けますので、車がなくても生活に



【Leeds University Union (LUU)】

不便はありません。

また、電車やバスで多少足をのばせば、北には広大なヨークシャー・デイルズ国立公園が広がっており、トレッキング等を行う場所には事欠きません（写真）。また、大学内には、EDGE という日本の大手フィットネスジムの施設に相当するレベルのものがあり、研究者に不可欠なウェルビーイング、身体面の健康を保つために必要なものが揃っています（写真）。



【ヨークシャー・デイルズ国立公園の一風景】



【The EDGE。リーズ大学の運動施設】

## 研究活動

私は、リーズ大学の Sustainability Research Institute (SRI) に Visiting research fellow として滞在しました。SRI には、自然科学や社会科学問わず様々な分野の研究者がおり、非常に学際的な組織だと言えます。私の専門である社会科学分野で言えば、特にプラネタリーバウンダリーや脱成長論に関するエコロジー経済学 (ecological economics) 研究で活躍している研究者が多くいます。

今回は、もともと知己であった Lucie Middlemiss 教授にお世話になったため、比較的スムーズに自らの研究活動を開始することができました。今回、生活面も含め様々な点で同教授に大変お世話になり、ここで改めて感謝を申し上げたいと思います。

在外研究の主目的は人によって様々だと思いますが、私の場合、主目的は共同研究の一層の推進と新たな研究ネットワークの構築、また、自らのこれまでの研究成果の広報にありました。今回の滞在では、リーズ大学の関連する他組織はもちろんのこと、マンチェスター、リヴァプール、シェフィールドなどイギリス北部の他の有力大学にも多数出張して自らの研究結果を同分野の研究者に直接伝えることができたため、大変生産的



【SRIがあるSchool of Earth and Environment棟】

かつ有意義な滞在になったと思います。

単なる所感ですが、やはり研究で成果を出している海外の大学の研究者は、基本的に研究に専念している印象です。文系と理系（研究テーマでなく研究組織面での区別）によって状況が異なると思いますが、日本の大学の研究者が世界と互角に競争するためには、まず何よりも研究に専念する時間が必要であると感じました。

### 日常生活について

最後に日常生活について述べたいと思います。まず、イギリスは、他の国と比べ住みやすい印象です。自炊ができれば日本食も作れます（材料は容易に買えます）。外食についても、様々な国の料理が食べられます。治安の面でも比較的安全だと思います（もちろん、日本より安全な国は少ないと思いますので、人によって感じる差はあると思います）。

ただ昨今では、他の欧米諸国と同様にイギリスにおいても物価の上昇が著しく、現地でも cost of living crisis（生活費危機）という言葉がよく使われています。加えて、日本人にとってより深刻であるのは、円安です。現地の物価上昇に加えて円安が進行したため、円ベースで見れば、すべてのモノの価格が非常に高い状況です。関連して、鉄道、バスや学校のストライキも頻繁に起こっており、常にストの情報をチェックする必要があります。大学の施設（図書館など）もストにより、休業がしばしばです。現在の為替レートの水準が続く場合、過去の固定レートの時代ほどではないにせよ、日本人の海外渡航、滞在にとって厳しい時代が続くといえるかもしれません。

学問の発展のためには、日本と海外、双方向の交流が必要です。Zoom や Teams などのオンライン会議システムの普及により海外出張は不要になったとの声もありますが、何もない状態から海外との共同研究を始めるためには、研究者間の対面での交流が重要だと思います。このような意味で、貴財団の援助活動は、我々研究者によって極めて重要なものだと考えます。貴財団の援助と在外研究の機会を与えて下さった筑波大学の皆様に感謝を申し上げつつ、ここに筆を擱きたいと思います。

---

助成年度	2022年度(派遣期間 2022年7月～2023年9月)
助成種類	研究者海外派遣援助(長期)
研究課題	包摂的な低炭素化・エネルギー転換に関する研究
派遣先	リーズ大学(イギリス)、西ブルターニュ大学(フランス)